

人生の贈りもの

演出家 鈴木忠志(72)

①

医師チエーホフに学んだ世界観

——今年は大雪で、ここ利賀村(現富山県南砺市利賀村)の合掌造りの建物も野外劇場も降り積もった雪の下ですね

舞台が上演されている夏の風景とは別世界でしょう。冬になると毎日のように除雪車で雪と闘っています。私は富士山の白い頂を眺めて育ち、「雪は美しい」と教わりました。利賀村で30年以上過ごすと、美しいなんてとんでもない、自然は暴力だと実感しますね。



「早い年は10月に雪が降り始め、翌年5月ごろまで残っている」
＝門間新弥撮影

——中学3年生のときに上京するまで、静岡県清水市(現静岡市)で過ごされました

実家は材木屋で、4人兄妹の次男として生まれました。仏壇と神棚がある家で、祖父は義太夫の師匠。一方で、岩波書店のヨーロッパ文学に憧れる姉さんがいて、中学の先生はベートーベンのレコードを聴かせてくれたり聖書をラテン語で教えてくれたりしました。子ども時代の体験は戦前と戦後、

東洋と西洋が混在していました。いなかには退屈だと感じていました。先生が「この子は東京に出したほうがいい」と両親に話してくれ、東京・王子の飛鳥山で大学生に囲まれて下宿を始めました。

——演劇に興味をもったのは？
東京都立北園高校に進学すると数学や物理の授業は代返を頼んで図書室で本を読んでいました。これがばれて、退学処分になるところでした。国語の坊城俊民先生は三島由紀夫の友人だった人で、文学や芝居の話をしてくれました。

そんなとき、チエーホフの短編小説に出会いました。面白かったけれど、戯曲となるとさっぱり分からない。一貫したストーリーがなく、いろんな人物が断片的に登場して会話しているだけ。医師だったチエーホフは人間を観察、分析し、人物の心理ではなく関係性を通して人間の悲しさを描いた。「人間にはどこか変なところがあ

り、これが正しい、悪いというものはない」と気づきました。チエーホフは、「世界は病院である」とみなす私の世界観の原点になりました。だから、看護婦や車イスの人物を舞台に登場させるのです。

大学は高校で学んだ仏語で受験できた早稲田大学政治経済学部を受けました。学生演劇が盛んな早稲田でチエーホフの戯曲はどんな風にならされるのだろう。それを知りたくて、チエーホフ作品をとり上げていた「自由舞台」に入部しました。(聞き手・青山祥子)

——聞き手・青山祥子
すずき・ただし 1999年、静岡県生まれ。劇団SCOT主宰。早稲田大学在学中に演劇活動を始める。76年、富山県利賀村に拠点を移し、世界各地での上演、共同作業に取り組む。94年、日中韓で開催する「BeSetO演劇祭」を創設。主な演出作品は「リア王」、「シラノ・ド・ベルジュラック」、「エレクトラ」など。

人生の贈りもの

演出家 鈴木忠志(72)

2

半年働き、喫茶店の2階に常打ち小屋

——大学時代は「役者」だったそうですね

「自由舞台」は150人以上の大部帯ですぐに役がつかま



1982年、第1回の世界演劇祭を富山・利賀村で開催。病気を患って駆けつけた寺山修司(左)と対談した。寺山は翌年死去。

た。役者は目立つし、名セリフを口にすると、頭ではなく身体
の記憶として身につくような気が
しました。良い書き言葉を演
劇という手法で音声化したいと
考えるきっかけになりました。

集団で何かをやるといふことが面白かった。中学の終わりから一人で下宿していて孤独だったから。朝から晩まで討論しているうちに、議論好きのおしゃべりになっちゃった。同期には劇作家の別役実がいました。

——当時は60年安保闘争の真っただ中です

劇団幹部の多くは共産党員で、メーデーに行かないと言うと「売国奴」と怒鳴られた。チエーホフも恋愛も「革命」のためにするんだと。デモには参加

したけれど、革命のために芝居しているわけじゃない。60年にアーサー・ミラーの「セールスマンの死」を上演しました。あの時代、米国の消費社会がテーマの作品を選ぶのは大変な決断だったけれど、これは日本でもあると感じた。大学での大きな公演の初演出になりました。

——卒業後、早稲田小劇場を結成しました

別役が書き上げた「AとBと一人の女」「象」を読んで、彼の作品を演出してかたちにした
の作品を演出してかたちにした
いと思えました。高田馬場から有楽町まで2人で歩いて劇団をつくらうと盛り上がりました。61年、前身となる「新劇団自由舞台」を創立しました。大学に6年間通い、サラリー

マンにはなれないと思った。卒業後、新聞社で深夜のアルバイトをしました。「世の中はつまらないんだから職業をもって退屈してその欲求不満で演劇をやろう」と昼間勤める仲間たちと午後6時から稽古をしました。

66年に「早稲田小劇場」を旗揚げしました。大学の近くの喫茶店「モンシェリ」で議論し合っていたら、早大OBの店主に「運動部よりすごい結束力だ」と感心されてね。稽古場がなく困っていると、「2階に劇場を建ててやる、建設費だけ出してくれ」と応援してくれた。十数人で半年間働いて180万円

くらい稼ぎ、常打ち小屋「早稲田小劇場」が完成しました。——「天井桟敷」の寺山修

司、「状況劇場」の唐十郎らとともに、「アングラ演劇の旗手」として脚光を浴びました

背景も方向も違ったけれど、ヨーロッパの近代劇に学んだ新劇を否定するといふ連帯感があった。古い体制を壊して日本を変革しようという動きは文学や音楽、建築などの分野でも巻き起こり、ジャンルを超えた交流の中心に演劇がありました。

アングラ系の芸術家は感動があれば何でもやりました。寺山や唐は騒ぎを起こすと、「あいつらしい」と話題になってずいぶんだよ。こっちは正攻法だから、サービスピ精神旺盛でちゃめっ気があった寺山には「教科書みたいだな」と言われたっけ。
(聞き手・青山祥子)

人生の贈りもの

演出家 鈴木忠志(72)

3

パローとの出会い 人生の転換点に

—1970年初演の「劇的なものをめぐってⅡ」で、歌舞伎、近代文学といった要素を現代劇に引用しました

「劇的」シリーズは、劇団で名作戯曲をやったとき、異質なものを新しい関係に統一する際に起こる偶然性に興味を感じてつくりました。「劇的Ⅱ」で鶴屋南北、泉鏡花、ベケットなどの言語的素材をつないだのは白石加代子の身体です。髪を振り乱し黒目を寄せ、たくあんを丸かじりする狂気の衝動とエネルギー。女優は美しくなければならなかった新劇を批判する劇団のシンボルになりました。それに、いろいろな作家の演出



1977年、来日したジャンルイ・パロー(左から2人目)、マドレーヌ・ルノー(同3人目)と。右端は白石加代子

を頼まれるうちにしんどくなってきたのです。作品を勝手に書き直せないからね。書く人は言葉にこだわり、統一性を求める。演出家はそれよりも空間を表情豊かにみせることが面白いです。そこで、「劇的」シリーズ以降、過去の膨大な遺産を構成し、私の視点を通して世界観をつくり出そうとしました。この世にいない作家から文句を言われることはないね。

—72年、パリで開催された「諸国民演劇祭」に参加しました。芸術監督は映画「天井桟敷の人々」の名演技で知られ、オデオン座の支配人を務めた俳優、演出家のジャンルイ・パローです。初めての海外公演で、高校生の頃に仏文学に憧れた私は興奮しました。

意気込んでパリに着くと、大劇場とは違ってプロレスの特設リングのような舞台に戸惑いました。多国籍の観客の前に「劇的Ⅱ」を上演するとアンコールが何度もかかり、ブラボーと手拍子が沸き、足拍子に加わり……。熱狂的な反応に酔いしれてホテルに戻り、カセットテープの録音を再生して感動を味わいました。西洋のまねで始まり、受け入れるだけだった日

本の現代劇が世界に出られるようになったんだと喜びました。

公演後、世界各地の演劇祭に招待されるようになりました。自らの作品を発表しながら世界の劇団を呼んで、手作りの建物で演劇祭を開いたパローとの出会いは私の演劇人生の転換点となりました。

—74年、岩波ホールが演劇も制作するに就任されました

映画の岩波ホールが演劇も制作することになり、高野悦子総支配人に誘われました。公演で海外を回り、欧米には「ギリシャ悲劇とシェークスピアを知らずに演劇を語るなんてあり得ない」という認識があると気づきました。岩波は西洋文化の窓口的存在だったのでギリシャ悲劇に挑戦しました。

第1回公演「トロイアの女」では能、新劇、そして早稲田小劇場と多様な演劇の役者を同じ土俵の上に置き、新しい演劇スタイルを生み出そうと試みました。またトロイア落城の悲劇に、日本の敗戦のイメージを重ねました。ギリシャ悲劇を現代風に演じていた欧米で新鮮に捉えられ、一つのスタイルとして海外で上演されるようになりました。(聞き手・青山祥子)

人生の贈りもの

演出家 鈴木忠志(72)

合掌造りの里に 劇団ごと移転

4

——建築、音楽、文学など他分野の知識人と交流を深めました
大江健三郎、磯崎新、井上ひさし、大岡信、武満徹といった人たちと一時期、毎月のように勉強会を開きました。自分の仕事や関心事を報告し、議論しました。私の舞台を見て、学者は台本、小利賀村)に移しました



富山・利賀村で、劇団の「座付き建築家」を自任する磯崎新(左)と

説家は女優の体つきや表情、建築家は舞台空間と視点がまったく違うので面白かった。刺激を受け、見える世界の向こうの見えない世界を想像するようになりました。——1976年、早稲田小劇場の拠点を富山県利賀村(現南砺市

外国の演劇の水準を知り、負けられないと夜中でも集まって稽古できる場所が欲しくなりました。アイデアは思いついたらすぐに試さないと消えてしまう。でも東京だと夜遅く騒げず、劇団員は電話ボックスの中や大通りの歩道橋の上でセリフを練習していました。

つくるから残ってほしい」と当時の村長に引き留められました。私の公演を見続けてくれた磯崎が設計を引き受けてくれました。釣りをしながら語り合い、合掌造りを改造して日本の能舞台をイメージした劇場にしました。次いで古代ギリシャに原型を求めた野外劇場が完成。こけら落としの「世界演劇祭」にはタデウス・カントールら国内外の演劇人が参加し、人口1200人の村に延べ1万2千人の観客が押し寄せました。

喫茶店2階の小劇場の契約が切れるのを機に地方で場所を探しました。雪に埋もれた合掌造りを一見した瞬間、運命を感じました。欧米では有名な演劇祭は地方都市で開催され、素晴らしい劇団が地方にもある。ここ利賀村で芸術文化の東京一極集中を変えてみせると劇団ごと引越してきました。

こんな過疎の村で公演が成功するわけがないと言われたけれど、5年間の会員制で全国から観客が通ってくれました。ただ、利賀村での公演は年1度だったため、海外公演のギャラ収入で劇団を維持しました。家賃月2万円の合掌造りの契約期間の5年が過ぎ、引き払おうとしたら、「この村にあんな人が集まって夢をもてた。劇場を

谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」じゃないけれど、合掌造りの舞台には闇がある。光の当て方で雰囲気ガラリと変わるので、照明に凝るようになりまして。空間の隠れた可能性を引き出したくなったので

(聞き手・青山祥子)

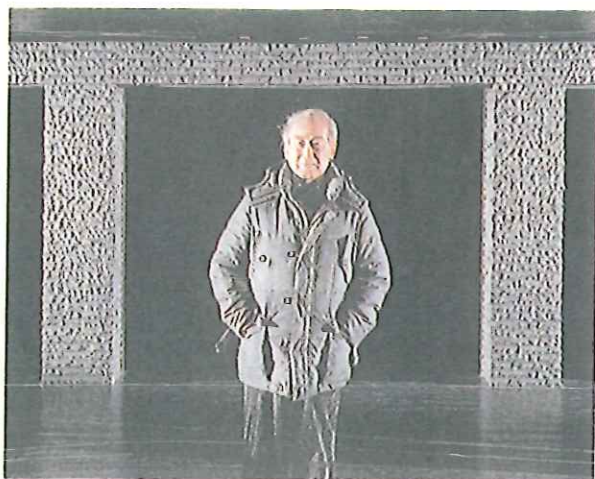
人生の贈りもの

演出家 鈴木忠志(72)

アジア、世界の中で位置づけたい

5

俳優訓練法「スズキ・トレーニング・メソッド」は、モスクワ芸術座、米ジュリアード



「利賀村は世界の演劇人の交流拠点。この志を継いでもらいたい」 門間新弥撮影

音楽院をはじめとする海外でも取り入れられていますね

「トロイアの女」(1974年初演)の出演者の一人に能役者の観世寿夫がいました。舞台上での存在感は見事で、「静止した状態の美しさと強さを日本の伝統に学びました。」

私の訓練では、「足踏み」をすることで足腰を徹底的に鍛えます。身体をコントロールするために、重心や呼吸を体感するのです。静止して体をぐっと集中させてセリフをしゃべると、ものすごいエネルギーを発します。全員がこの訓練をすることで、集団力が生まれるのです。

欧米では、日常生活のナチュラルな動きで表現するリアリズム演劇が盛んでした。西洋のマ

ネではないギリシャ悲劇やシェークスピアを演じるには、同じ土儀で違うものをみせるしかない。米国で生まれた自動車の生産方式から、独自の生産方式を編み出した「トヨタ」と同じことをしたわけです。

水戸芸術館、静岡県舞台芸術センターと、当時としては画期的だった公立ホールの芸術総監督を務めました

劇場に芸術監督を置くことはグローバルスタンダードです。どうして日本のホールにはこうした専門家がいないのだろうと思っていました。公的なポストに就く責任により、芸術家は公共性を背負った視点をもつようになります。自己表現だけの作品は私小説のよ

うなもの。日本にはエンターテインメントと私小説の芸術はあって、公共性のある芸術が育っていないのです。税金で制作するので、地域や住民を無視できません。地域の存在感を発信するユニークな作品を創造しなければならぬのです。

静岡の芸術総監督を2007年に退任後、劇団SCOTの活動を再開しました。今後は「我々は世界をこう見る」という自己主張をしていくつもりです。

今年8月に英国の「エディンバラ演劇祭」に参加し、10月には中国・北京で「リア王」を演出される予定です。「シアター・オリンピックス」「BeSeTo演劇祭」といった国際演劇祭を創出し、ずっと

世界に目を向けて活動してきました。ただ、我々の時代は演劇といえはヨーロッパでした。欧米の文化に「植民地化」されている感をぬぐえませんでした。

昨年は台湾制作の「茶花女」を演出し、現在は中国国立中央戯劇学院の生徒を指導しています。10月の公演に向け、5月には富山・利賀村に30人近く滞在して稽古する予定です。アジアでの活動が増え、この共通の文化圏である地域を検証しなくなりまし。政治経済で重要な役割を増しているアジアを、世界の中にきちんと位置づけてみたいと考えています。

(聞き手・青山祥子) 〓おわり